

# 養育里親

～もうひとつの家族～

18

坂口 伊都

## はじめに

里親委託を受け、もうじき丸2年になります。今は、家族の新しいスタイルが出来上がってきて、里子と過ごすことが当たり前になり、家族それぞれに自分の生活を取り戻しています。里子の行動に驚かされることは相変わらずですが、それに慣れたのか、はたまた疲弊したのか、イライラよりも「またやっているわ」と呆れるようになってきました。だいぶ、里子と私の波長が合ってきたようです。里子の方の振舞いも、変わりつつあるのではないかと思います。

先日もプールで派手に膝をすりむいて帰って来たので、お風呂上りに消毒、絆創膏を貼って様子を見ていたら膿が出てきました。里子に「病院に行こうか」と話すと、「いや、面倒くさいか

らいい。大丈夫」と嫌がるので、里姉にも見てもらい「病院行った方がいいよねえ」と誘い水を出し、「これは行った方がいいで、いやぁ痛そう」と合わせてもらいました。二人から言われたら、里子も心配になったのか、素直に病院に行くことを了承しました。

この子はもともと身体が丈夫なので、予防接種以外で病院に行くことはありませんでした。里子は、医療保険ではなく、施設者入所用の受診証で受ける仕組みになります。発行機関名は都道府県知事で、施設名は管轄の児童相談所です。里親会等で、受診証を巡ってトラブルがあると聞いていました。例えば、今は保険証と同じようにカードサイズに変わりましたが、保険証とは似ても似つかない派手な色の A4 用紙の半分ぐらいの大きさがあり、それを持っているだけで異様なほど目立ちます。受診証のトラブ

ルは、近所の人や友達が聞いているかも知れないのに、通称名ではなく本名で呼ばれた、受診証の説明をしても信じてもらえずに児童相談所に確認の電話を入れられた、高校生ぐらいになると里子だと知られるのが嫌で遠くの病院まで通っていた等です。兎角苦勞するようで、あまり病院に行きたくないなあという憂鬱さを持っていました。

こうした情報を元に受付の方にできるだけわかりやすくする方法を考えました。実際にしたことは、付箋で通称名を書いて貼っておき、「すみません、ちょっとわかりにくくて申し訳ないのですが」から始め、「里子さんです。本名はこの名前ですが、学校では〇〇と呼ばれています」から「生活保護の医療券と同じような流れになると思います」と伝えました。「学校では」と「生活保護」の例えは、イメージしやすかったようで、「わかりました。ちょっと調べてみます」と受け取ってもらえました。診察券もお薬手帳も通称名にしてもらいました。調剤薬局では、「ややこしいですね」と言われ、小さく本名で呼ばれましたがその名前に反応しない親子を見て、「あっ、坂口さん」と言ってくれました。薬を貰ってから「ややこしくて、すみません」と伝えると「いえいえ、そんな」と返してくれました。

病院にたまたま友達親子がいて、その友達とお母さんから「どうしたん？」と話しかけてくれます。ちょっとドキドキしましたが、トラブルもなく過ごせました。友達は里子より年下の子でお母さんの膝の上に乗ってみたり、寄りかかったりして甘えていました。里子は6年生という年齢もありますが、身体接触をして甘えることは皆無なので、横目で見ていて羨ましかったです。委託時にもっと小さければ、身体を使って甘えてきたのかなあなんて、つい考えてしまいます。

養育里親をテーマにマガジンを書き始めた頃

は、書き続けていけるのかと不安でしたが、今のところは、次から次へといろいろなエピソードが起っています。

今回も里親支援について書いていきたいと思っています。前に挙げた里親支援は以下の7点です。

- ① 里子の生い立ち・背景を知る
- ② 里子の強み、弱みを知る
- ③ 里親自身の得意、不得意を知る
- ④ 里親家族のバランスを知る
- ⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
- ⑥ 行政、地域への働きかけ
- ⑦ 何を目標にするか考える

前号まで3回続けて⑥まで書いてきました。今回は、最後の⑦の項目について書きたいと思っています。どうぞ、最後までおつき合ください。

## 何を目標にするか考える

里親をして、平穩に暮らせるところまでなかなか辿り着かないと感じています。これを書いている間も事件が次から次へと起こり、安定してきたと思った矢先に凹むことが続き、頭を抱えています。この2年間、悪い方向にばかり起っているかと問われれば、いい事も同時並行で起きていると答えます。里子なりに挨拶をするようになったり、何も言わないのにお手伝いをしてくれていたりと、少し甘えられるようになったかなと喜んでいると、とんでもない事が起きて肩を落としています。良い循環と悪循環が同時並行でやってきて、悪循環の方がパンチが強く、このまま里子と暮らしていけるのか不安に襲われました。その時、里親が抱え込んだらいい事が起きないと奮起し、児童相談所の担当ワーカーにSOSの連絡を入れました。学校とも頻繁にやり取りをし、必要があれば他の機関と

も繋がるようにしています。

里子との生活は簡単ではありません。だからこそ里子がこの家を出て立ち立つ時をイメージを目標にし、そこに向かって今できることは何かを意識し続けることが大事だと感じています。

以前にも書きましたが、里親になった当初、「母親」として振舞おうとして、上手いかなかった経験があります。我が家の場合は、10歳で里親委託になりましたから、この子とはその間の空白があり、情を表に出して家族として振舞えるわけでは決していないということを知りました。里親と言う名の通り、里子の「親」になろうと必死になることで、私の一方的な親切心に里子が応えてくれないことにイライラし、不適切な対応に陥ってしまった反省があります。

その時、この子の中で起きる目の前の出来事に気持ちを奪われると、ドンドン気落ちしてしましますが、遠い将来に目を向けて、今はそこまでの通過地点だと気持ちを切り替えることで、気持ちが落ち着いていきます。押し込められず引いてみなというところでしょうか。目の前のトラブルにだけ気を取られるのではなく、子どもの感じ方、理解の仕方がどなっているのかを考えつつ、どうしていけばいいかを一緒に考えてもらう行動に出て、今までの視点と違う視点を獲得することで救われることは多いと感じています。



## 里子の生活変化

里子との生活の中で未だに里子の行動が予想を裏切り、肩透かしを食らう感覚が今も続いています。目標を立てるにしても、子どもにどのような変化が起きているのか考えることが必要なのでしょう。そこで何故、予想のつかない行動に遭遇するのかを考えていくと一つの仮説に突き当たりました。児童養護施設で暮らしている時、大人である職員は交代勤務でずっと一緒に過ごしません、他の子どもとはずっと一緒に過ごします。子ども達の中で、自分がどのポジションを獲得するかは最大級の課題だとすると、行動判断のベースが「子ども間で作られた価値観」にあるのではないかと。この仮説を元に里子の行動を観察すると腑に落ちることが多くありました。子どもが考える価値観なので、道徳的ではなく稚拙で大人との関係を軽視し、悪態をつくという感じです。この行動を取ることによって子どもの中で一目置かれる立場になろうとしてきたのかも知れません。

それが、里親家庭に入ると関りの中心が子どもから里親に変わります。里兄、里姉がいますが出会った頃は高校生と中学生という年齢になっていたこともあり、里子との関りの主は里親でした。これは、今までの生活と180度転換したと言ってもいいのではないのでしょうか。横から縦の繋がりに変わるというイメージです。そう捉えると、里親になってから里子の行動も納得できます。大人から教えられる社会の価値観がベースにないため、善悪で説明をしても伝わらず、大人との関係を軽視するスタンスを示すために反発し、社会のルールに従うことがカッコ悪く感じ、受け入れることに抵抗する。そうされると、大人側はわからなさと共に可愛げがない里子に苛立ちを覚えます。大人とのコミュニケーション方法をあまり知らず、さらに親子

関係がどういうものかを知らない里子とのコミュニケーションが常識の範囲で留まるはずがないことを知りました。私は知らぬ間に絶対的な力を持つ「親」の存在を感じながら成長し、親になったらその価値観を押し付ける形で里子と接していたようです。急に「親子関係」を求められても、里子には困惑しか生まれなかったのでしょう。気をつけなければならないのは、里親宅で里子の立場は弱いということを忘れないことだと思います。生活スタイル、暗黙のルール等を前提に生活していること自体が里子にはわかりにくい生活そのものになっていたのではないかと思います。

さらに、児童養護施設と里親との大きな違いをあげるなら、大人の所有物が里親宅には溢れているという点です。児童養護施設で大人が生活していることは少なく、していても部屋が分かれていて施錠で管理されていることが多いと思います。里親宅はリビングにある物一つひとつから工具用品、携帯、ゲーム、化粧品、バック、財布等の細かい物まで子どもの興味をそそるような刺激物が数多くその辺に置いてあります。また、部屋を施錠して管理する発想があまりありませんから、その気になれば子どもが手に取ることができる環境になっています。

我が家では、まず里子の部屋に工具類や充電する物がないのに充電器、CD等が集まっていきましました。いろいろな部屋の引き出しを開け、中身を確認し、興味があるものを持って行きます。「それは、あなたの物ではなくて、父ちゃんのものでしょう。父ちゃんが持って行っていいと言ったの？勝手に自分の部屋に持っていかないで」と何回も言うのですが、収まりません。学校にもいろいろな物を持って行って、支援学級で使用するのかと疑問に感じて質問すると「先生が持ってきてって言った」と返ってきます。学校の方でも同じような事があったようで、「父ちゃんが持っていけてって言った」と話して

いたそうです。この子の「所有物」の感覚はどのようになっているのだろうと疑問に感じ始めていました。支援学級の担任と話し、「勉強に関係する物だけ学校に持って行く。その他の物が必要な時は先生が親に伝えてから持って行く」というルールにしましたが、ちよくちよく確信犯的に持って行ってはみつきり、怒られていました。

ある日、放課後等デイサービスが小学生までの所から、いろいろな事ができ、来年からは中高生の方へ移行になるので、もうそろそろそちらに変えてみたらどうでしょうかと提案をいただき、そちらに通うようになりました。そこでは、休憩時間にゲームをしてもいいルールになっていて、その様子を里子が見ていたのも、自分もゲームを持って行きたかったようです。もう一人の6年生は親に話し、親からデイサービスに問い合わせをし、学校にいる間は先生に預ける約束が出来、無事休み時間にゲームをすることができました。我が家では、里子がブツブツと「デイサービスでゲームしている」と言うので、「どういうこと？」と質問をしても返事がなく、どういうことなのかわからないまま、ゲーム自体も取り上げている最中だったので、話しがそこで一端止まりました。次の日、里子は体操服入れにゲームを入れて持って行き、それを担任が見つけ問いただすと「お前には関係ない」と言ってしまう、教頭先生の所まで行く事態になりました。学校から父に電話が入り、後日ゲームを父が取りに行き、デイサービスに問い合わせると事の顛末がわかりました。一つひとつの事柄がどうつながるのかわかず、何が起きているのかさっぱりわかりませんでした。

里子が取った行動は、取り上げられているゲームを見つけ出し、親が見ていない所を狙い、体操服に忍ばせ、学校に隠して持って行ったとなります。確信犯的に持って行っており、問題が大きくなる方の道を選んでしまっています。その判断は稚拙で、この子の弱い部分です。

大人を信用していないのだなあと改めて感じました。何をどう伝えたら、この子に伝わり、残るのだろうと頭を悩ませました。その後も、「モノ」にまつわる事件は続き、悪化していききました。

## 抱え込まない

里子が生活の中で挨拶をするようになってきたり、大人の言うことを聞いてみようと思いはじめていることを感じる瞬間が増え始めていますが、その一方で、「モノ」に関する行動問題が多発して、頑張りが帳消しになることが続き、ある程度まで悪化した時、もう抱え込まない方がいいと感じました。ある出来事をきっかけに児童相談所の担当ワーカーに連絡を入れ、この子の理解の仕方やどう伝えていったらいいのかを一緒に考えてもらいました。担当ワーカーは、この4月で変わった4人目の担当になる方ですが、事態を真摯に受け止め迅速に動いてくれました。それが、とても有難かったです。次から次へと凹むような出来事が続き、この子の養育里親として続けていけるのだろうかという弱気になっていたのも、「大変でしたね」と労ってくれ、この子を支えるために何ができるのかを具体的に一緒に考えてもらうことで、「まだこの子の養育里親を続けていけるのかな」と思うことができました。里子もいつもと違い、とても大きな事をしてしまったのだと感じているようでした。

ちょうど心理検査もお願いしていたところだったので、起きた問題を心理検査の結果からも考えて見ることができました。心理検査でこの子の内面全てがわかるわけではありませんが、できる事とできない事の差が激しい理由が何なのか、客観的にこの子の理解の仕方にどのような傾向があるのかを知りたかったのでお願いしました。心理の方もこの4月から担当になった

方で2人目の担当になります。所見返しを小学校でお願いし、学校の先生も同席していただきました。

生活力と見える物を組み立てていく力は非常に高く、記憶することや状況判断、複数の意味が重なる部分の理解が弱いと説明を受け、一つずつでないとう理解が難しく、言葉で伝えるとわかりにくいのが、視覚に訴える方法だとわかりやすく、反省すること自体が難しいと言われました。つまり、学校に持っているはいけなモノを持って行ったから、しばらくゲームを禁止しても本人には、その意味が通用しないということです。ゲームをしたいから、生活態度を改めようという発想を持たない人にそれをして、「わからなさ」を植え付けるだけに過ぎません。

ここで困るのは大人の方です。大人が当たり前前に感じている常識が通用しないのですから、子どもに寄り添うためには、自身の思考回路を一端横に置く必要があります。全体の流れを断ち切り、一つひとつの出来事にのみ対応をし、他につなげようとしない。これは、私にはなかなか気持ちが悪く、落ち着かない、あるいは納得できない感覚が付きまとい、厄介だと感じてしまいます。これから自分なりのコツを見つけられることを期待して、続けてみようと思っています。

所見返しでは、それぞれ学校や家での様子を話しながら、里子について語りあいました。可愛い時、大人が苛立ちを感じる時、頑張っているなあと感じる時などが具体的に出て、この先生でも私と同じような感情が動く時があるのだと知ると、少し安心しました。出来事の渦中にと私の関り方に問題があるからではないかと責めようとする気持ちが湧いてきます。第三者の意見を聞くこと、自分の気持ちを言葉にしていくことで整理ができ、発見があったりしました。いつまで経っても里親であることに自信が持てませんし、これからも里親をやっている

のだろうか何回も落ち込むことがあるのだと思います、周りの人と一緒に里子を支えている感覚を持てると、もう少し何とかかなりそうかなと思えます。

正直、立て続けに事件が起こるとこの養育里親家庭に来たことがこの子にとって良かったのだろうか悩みます。モノの刺激が多いこの環境に身に置くことで、善悪もままならないまま、いろいろな行動に出してしまっているなら、ここにいること自体がしんどいことになってしまっているのではないかと気持ちが沈みます。冷静に考えれば、この子が大人になっていく過程の中で、モノの刺激はますます増えていくはずですから、今この場で試行錯誤していくことが不可欠なのでしょう。

## 終わりに

この連載を書き始めた頃から、里親制度の推進がどんどん強化されていき、7月31日には厚生労働省から、虐待などのため親元で暮らせない子ども（18歳未満）のうち、未就学児の施設入所を原則停止する方針が明らかにされ、里親への委託率を現在の2割未満から7年以内に75%以上とするなどの目標を掲げました。なんと大胆な目標だと驚きましたし、本当に実現可能になるのだろうかと思ってしまう。

実現するためには、まず養育里親の社会的に認識が浸透し、里親登録者を増やさなければなりません。ただ増やせばいいというものでもありません。個人的な感想ですが、ある程度の覚悟を決めて里親に臨んだつもりですが、それでも難しさや気持ちが落ち込むことも多く、どう接すればいいのか日々悩んでいます。里親として外に助けを求めなければ、里親不調に陥る危機的な感覚もあります。特に今回は、この原稿を書いている期間中に幾つかの大きなモノに

まつわる事件があったので、気持ちが落ち込み、そこから這い上がっている最中なので、余計に里子と里親家庭への支えがなければやっていけない現実を噛みしめています。

一人の子どもにしっかりと手をかけていくことが求められると思いますし、それをすれば子どもはいろいろな表出をします。どこの家庭でも子育ての葛藤があり、里親はそこに何か新たな葛藤が付いてくると感じます。その前提で、里親制度を語って欲しい。何かが起こるのは当然で、その時にどのような体制で里子と里親家庭をサポートできるのか。いざという時に助けを求められる里親にどうやったらなれるのか。その辺りの議論がされてもいいのではないのでしょうか。

嬉しいことも辛いことも同時期に起こる養育経験は、里親をして初めて体験しているように思います。子ども一人ひとり性格も違います。子育てをしていたからこそ、肩透かしを食らったと感じるのでしょう。里親に言葉で「抱え込まないで、何でも相談してください」と言うだけでは、どの程度の状態になったら、どのように伝えていったら伝わるのかわかりません。私は仕事上で児童相談所のワーカーと関わるが多く、どのように助けを求めたらいいのかイメージできるので、躊躇なく相談できたと思います。相談した後のイメージが持て、子どもの将来を里親と一緒に考えてくれることが大事なのではないかと思えます。

